

(承前)

飛行機の爆音のような音が聞こえている。

一升瓶を入れたスーパーの袋を下げたまま、男は空を見上げた。しかし、雲が厚く、何も見えない。

雲なのかスモッグなのか分からない。どっちでもいい、東京の空はそんなものだ。最近、空を見上げたことなどなかった気がする。

いつのまにここに来ていたのだろうか。

男は周囲を見渡した。

歌舞伎町の中、雑居ビルの屋上ということには分かっていた。だが、どうやってここまでたどり着いたのか、どうしてここにやってきたのかは、頭がぼんやりして分からない。

「私を足蹴にしても、音楽の道を極めてよ」  
痛みと侮蔑が入り交じった声が、頭の中で甦った。

あれは何年前のことだっただろうか。

ジャズベーシストとしての生活に行き詰まり、芸能事務所のマネジャー見習いを始めた頃だから、もう十二年も前のことになる。それまで信じきっていた妻が、若い男に狂っていることを知ったときの驚きは大変なものだった。

二十三歳で結婚して十五年。深刻な夫婦喧嘩さえしたことがなかった。年より十歳近く若く見える妻との生活は、友人たちからも羨望の眼差しで見られたものだ。

しかし、生活は苦しかった。ベーシストとしての腕は悪くなかったと自負しているが、純粹にジャズの世界で生きていけるほど、世の中は甘くなかった。

いつしか妻の態度や言葉に刺が混じることが多くなり、やはり

きれいな事ではなく、金を稼がなければと、あがき始めたときだった。

同じ年の妻は三十八歳。その妻が、十歳以上年下の会社員とつきあっていることを知った。仕事で遅くなると嘘をついてはその男と酒を飲み、デートを重ねていたのだった。

それでも、最初は一時的な気晴らしだろうと高をくくっていた。妻は疲れているのだ。自分が頑張つて稼げるようになれば、また心は戻ってくる。

しかし、甘かった。妻は若い男に恋をしていただけではなく、それ以前に、夫に愛想をつかしていたのだった。

「俺を捨てるのか？」

思わずそう訊いていた。女々しい言葉だということは承知の上だった。

「捨てる？ 逆でしょう？ 芸術家を気取るなら、私を足蹴にしても音楽の道を極めてよ。女が、魅力のある男に走るの当たり前よ。奥さんがよくできた女だから、あいつはミュージシャンとしては大成できないんだなんて陰口叩かれて……冗談じゃないわ」

結婚して以来初めて聞いた、妻からの罵倒だった。

何度かの修羅場の後、すべてが終わった。

妻を失ったとき、自分の音楽人生も終わった。

それから今までの人生は、オマケのようなものだ。芸能事務所での仕事は成功したが、仕事の内容は、音楽からはどんどん離れていった。芸のないタレントを次々にテレビ局に送り込み、使い捨てていく女術商売。

今では副社長という肩書きを持ち、かなりの高給も取っている。金が入るようになってからは、女にも不自由したことはない。しかし、かつての妻と比較できるほどの女には、二度と出会えな

つたし、今後も出会えるとは思えなかった。

風の噂では、離婚後、彼女は狂ったように次々と若い男を相手にし、三人目の男と再婚したらしい。その後、どうなったのかは知らない。

別れた妻のことを思い出すと、今でも心臓のあたりに鈍い痛みを感じる。

ふた月ほど前、テレビ局のプロデューサーからの紹介で、フゲン という秘薬を売る少女売春グループのことを知った。

やってきたテトラという少女は、知的な美少女で、別れた妻の若い頃に似ていた。生意気な口をきく少女だったが、それが絶妙の刺激になった。

妻も、心の奥ではいつもこんな風に思っていたのかもしれない。それを口にせず、「よくできた女房」を演じ続けた果てに爆発したのだろうか。そう思うと、テトラという少女を抱くとき、もう一度人生をやり直せるような錯覚さえ覚えた。

フゲンは噂以上の薬だった。

単にインポテンツが治るだけでなく、精神的な快感が素晴らしかった。薬が効き始めると陶醉状態になり、行為の最中のことはほとんど覚えていないほどだった。

しかし、後になって、感じた快感以上の深い悲しみと虚無感が訪れる。その正体はよく分からない。

手に、スーパーの袋の重みが甦った。

一升瓶が一本入っているが、中身は酒ではない。ガソリンだ。これを使う場所を探しているうちにここに来てしまったのだ。た。

飛び降りるにはこのビルは低すぎる。死ぬるかもしれないが、死ねないかもしれない。夢遊病者のように行動しながらも、そう

した計算は冷徹にしているところが不思議だった。

一升瓶の蓋を取ると、ガソリンのにおいが鼻を突いた。

両手で持ち上げ、頭の上から身体中に浴びせた。

目の前には、錆が浮いた手すりがある。乗り越えるのはそれほど大変ではないだろう。

知らないうちに、景色が妙に青く染まっている。

足下のコンクリートも、スモッグの向こうにかすむ西新宿の高層ビル群も。

ライターに火を点す。

身体中が炎に包まれても、なぜか熱さは感じなかった。身体の中の水分が一気に蒸発して、軽くなったような気がした。

浮き上がってみようか……そう念じてみると、本当に身体がふつと宙に浮いた。

ああ、飛んでいる。このまま妻のもとへ飛んでいけば、彼女は見直してくれるだろうか。

でも、どこにいるのだろう。彼女ももう五十歳になっているはずだ。今なら、嫉妬も超えて、互いの自己愛の半分ずつを交換できるかもしれない。

今、飛んで行くから……。

そう念じて、男は空に吸い込まれていった。

少女はそこで待っていた。

雑然とした階段室に創司が入っていきなり、彼女は「何人分？」と訊いてきた。

「三人分だ」

「見せて」

少し緊張したが、創司はさっき作ったデタラメの顧客リストを

渡した。

「じゃあ、これ」

リストの中身を確認すると、少女は財布から一万円札を三枚抜き取り、すっと差し出した。

創司は戸惑いを隠しながらそれを受け取り、ポケットに入れた。このまま別れてそれきりになってしまったら、ただの詐欺師になっってしまう。しかし、ここで演技をやめるわけにもいかない。

少女は挨拶も交わさず、すぐに通りへ出ていった。

見失わないよう、創司は少し距離をおいて後をつけ始めた。

少女は後ろを振り向くことはなかったが、つけられていることを知っているかのように、足早に雑踏の中へと入っていく。創司もつられて歩を速める。

そのとき、背後で女の悲鳴が上がった。

振り向くと、道の一角に、そこだけ時間が静止したような空間ができていた。

炎に包まれた黒っぽい塊が地面の上にあっただ。人間だということとはすぐに分かったが、身体が奇妙な形によじれ、頭からは血が流れている。

「身体に火をつけて飛び降りたんだ」

「自殺かよ。巻き込まれたらこっちも死ぬぜ、おい」

遠巻きにしてざわめく人垣をかき分け、創司は倒れている男のそばに行き、様子を見た。

冬ならばコートを被せて火を消すところだが、真夏ではそれもできない。それに、確認するまでもなく、もう絶命しているだろう。

肉が焦げるにおいが漂う。

見上げると、四階建てくらいの雑居ビルがあった。通りに面した窓はすべて閉まっているから、飛び降りたとしたら屋上からだ

ろう。

先日のソーブランドでの自殺者に続いて、この歌舞伎町で立て続けに自殺現場に遭遇したことになる。

「あんだ、この人の知り合い？」

「気がつくと、警官が来ていた。」

「いえ。通りがかっただけです」

「じゃあ、どいてどいて。邪魔だから」

創司は乱暴に肩を掴まれ、その場から押しやられた。取り巻く人垣の中に、あの少女の姿はもうなかった。

シャーレの中には、白っぽいペースト状のものが入っていた。それを見つめながら、男は抑揚のない声で訊いた。

「第三領域？」

「はい。やはり アミロイドが大量に付着していました。所長の推理は当たりましたね」

所長と呼ばれるにしてはまだ若い、四十前後くらいのその男は、シャーレから目を離すと、机の上に置かれたカルテを取り上げ、言った。

「白戸佐由理、三十八歳。血液型Oプラス……か。どういう素性だったかな」

「参議院議員・音山育朗の愛人です。音山は先週、自宅で首吊り自殺を遂げています。この白戸という女も、アイランダーがここに運んできた後、急速に鬱状態が進みまして、処置室で何度も自殺を図っています」

「本来なら順番は逆なはずだが、やはり組織が若い分、結果も早く出るということだろうね。で、林檎は？」

「すでにBチームに渡して分析を進めています」

「きつちり調べた後で、ジャムを作ってください」

所長と呼ばれた男は、そう言っただけでシャーレを部下に返した。

「承知しております」

部下は渡されたシャーレを恭しく持って部屋を辞した。

腰に下げた携帯電話が振動した。

昼の十二時十分。店に客は誰もいない。

「はい」

板倉様でしょうか？

あの少女からの電話だった。

渡した偽リストのいちばん上に、自分の携帯電話の番号と、板倉一郎という偽名を書いておいたのだ。

「そうです」

創司は少し声のトーンを変えて答えた。

はじめまして。わたくし、フゲンのお届けサービスをしています。よろしかったら少し説明をさせていただきます。ですが、今、お時間よろしいでしょうか？

……そう来たか。

創司はあの少女の顔を思い出しながら、声色を変えたまま訊いた。

「フゲンって、本当に効くのかな。インチキ商品を高く売りつけているだけなんじゃないの？」

はい。そうお疑いになられるのはごもっともだと思います。そこで、わたくしどもは、初めてのお客様には、効き目を直接体験していただいております

「というと？」

販売員がお客様のもとなにがかがい、その場で一錠お試しいただ

くというシステムです。効き目が現れなければお代はいただきません

「相手をしてくれるってこと？」

はい。容姿端麗な若い女性がお相手いたします

「で、いくらなの？」

二錠で十万円です

「一錠五万？ とんでもない値段だな」

みなさん、最初はそうおっしゃいます。でも、一度だけでやめてしまわれるお客様はいらっしやいません。みなさん、リピーターになってくださいます。これは本当です。わたくしどもはフゲンの効き目に絶対の自信を持っております

「ほんとに？」

はい。どうですか？ お試しいただけますか？ フゲン は他では絶対に買えません。このチャンス逃しますと、きつと後悔なさると思います

なかなか堂に入ったセールストークだ。創司は思わず苦笑した。「分かった。試してみよう。どうすればいい？」

ありがとうございます。場所は新宿近辺のホテルをこちらで用意いたしますが、大丈夫ですか？

「新宿界隈ならすぐに出ていける」

では、ご都合のよい日時を教えてください……

店番のことも考えて、翌々日の夕方ということにした。

「こつちから連絡はできないの？」

申し訳ございません。これは秘密を厳守していただかなければならないビジネスですので、初めてのお客様の場合は、ご連絡はこちらからのみさせていただきます。それでは、明後日の午後、またお電話させていただきますので、よろしくお願いいたします

「あ……」



引き留める間もなく、電話は一方的に切れた。

と同時に、入口の戸が荒々しく開けられ、およそ客には見えな  
い男が二人入ってきた。

一人は痩せ型で背が高く、一八〇はありそうだった。シルクシ  
ヤツの襟は第二ボタンまで開いていて、胸元から金のネックレス  
がのぞいている。三十代半ばくらいだろうか。

もう一人は背は低いががっちりした体格で、無精髭を生やして  
いる。窮屈そうに着た麻のジャケットの襟には金色のバッジが光  
っていた。

「うがわ宇川か？」

金バッジの男が、いきなり創司を睨みつけてそう言った。

「いいえ。宇川は店を辞めましたが」

「辞めた？」

「ええ。先週辞めました」

「じゃあ、社長は？」

「店主は奥にありますが、どんなご用件でしょうか？」

「それは直接社長に伝える」

「宇川が何かトラブルを起こしたんでしょうか？」

創司は問い返した。

男は、鼻でフンと笑うと、カウンターの上に片手をついて、身  
を乗り出すようにして言った。

「番頭さんに説明している暇はねえんだ。さっさと社長に取り次  
ぎな」

「ちよっとお待ちください」

奥の調剤室に行こうとしたとき、調剤室のドアが開いて、嵯峨  
野が出てきた。やりとりが聞こえたのだろう。

「わしがこの店の主だが」

そう言いながら、嵯峨野は男の襟元に光るバッジに目をとめた。

「貴島組か？」

男たちは黙って嵯峨野を睨み返した。

「宇川が何かしたのか？」

「そのことで会長が直接話をしたがつてます。一緒に来てもらえませんかね」

「進吉がわしに会いたいと？ 店に来ればいつでも話を聞くがな」

男は、右手中指にはめた指輪で、カウンターの upper を叩いた。カツンという乾いた音が店内に響き渡った。

「あんたがどれほどのお人かは知らないが、てめえんとこの若いもんが起こした不始末の話なんだ。出向くのはそっちじゃねえんですかい？ こうして迎えに来ているんですよ。今すぐ来られないういうなら、今夜にでも、リージェンシー新宿にご足労願います」

嵯峨野は少し考えていたが、「分かった」と返事した。

「では、七時半に若いもんを迎えによこしますんで」

「いいだろう」

男は唇の横にかすかな笑みを浮かべると、ゆっくり店の出口のほうに向かった。

出る間際、振り返ってこう言った。

「ところで、この店には、今評判のフゲン ったのは置いてないのかね」

「あいにく品切れです」

創司が答えた。

「勃たないなら、もっとましな薬を調合してさしあげるが」  
嵯峨野が言った。

男は数秒、殺意さえ感じる鋭い視線を嵯峨野に向けていたが、「七時半に来る」と念を押し、店を出ていった。

痩せて背の高いほうの男は、最後まで一言も喋らなかつた。金

バッジの男とどちらが格上なのか、創司にはよく分からなかった。男たちの姿が路地の雑踏の中へ消えるのを見届けてから、創司は嵯峨野に訊いた。

「きじま組ってなんですか？」

「説明はいらんだろう。そっち方面の連中さ」

「師匠とどういう関係があるんですか？」

「今は何もない。ただ、組長の貴島進吉って男、昔、一緒に仕事をしていたことがあってな。命を救ってやったこともある。やつがへまをしてチンピラに刺されたとき、応急処置をしてやった。わしの処置がなかったら、手遅れで命を落としておつたろう。そういう関係だ。もう三十年近く、顔も見っていない」

暴力団の組長と、かつて「一緒に仕事をしていた」とは穏やかではないが、そのことについては創司は何も訊かなかった。今までも、嵯峨野の過去について、自分からは突っ込んで訊いたことはない。

今の嵯峨野の生き様を見ていれば、一言では言えない複雑な過去があったのだろうということくらいは想像がつく。弟子として気にならないと言えば嘘になるが、師匠の過去を覗くような資格は、自分にはまだないと思っていた。

しかし、現在のこととなれば別だ。弟子として、尊敬する師匠に危険が迫るのを見過ごすわけにはいかない。

「呼び出しに応じるんですか？ 宇川さんが何かしでかしたとしても、もうクビにしているし、店とは関係ないでしょう」

「いや、しでかしたのは宇川がうちで働いていたときのことだろうし、どうせ薬にまつわることだろう。やつが何をしていたのか、わしも知っておく必要があるしな」

「そのことです……」

創司は、言いそびれていた宇川と謎の少女のことを説明した。

宇川が顧客リストを少女に売り渡していたこと。そのリストはどうやら、フゲン という怪しい薬を売りつけるために利用されたいらしいこと。そして、創司が仕掛けた罠に、少女が今、のってきていること。

嵯峨野は黙って耳を傾けていた。

最後に、創司はこう付け加えた。

「師匠、今夜の呼び出し、私もお供します」

「ボディガードのつもりか？ おまえのなまくら中国拳法に助けられるほど、わしはまだもうろくしておらんわ」

嵯峨野は苦笑しながら言った。

「いえ、暴力団相手に立ち回る自信はありませんよ。もっとも、向こうも、命の恩人である師匠にそうそう手を出すようなことはないと思います。それよりも、何があつたのか知りたいんです。店のお客様に迷惑がかかっているなら、私も事実を知っておかなければなりませんし」

数秒考え込んでいたが、嵯峨野は「いいだろう」と答えた。

「だがな、連中にはその女のことは黙っている」

「もちろんです」

創司としても、背景が呑み込めないうちから、暴力団にあの少女のことを売るようなことはしたくなかったので、嵯峨野の言葉に内心ほつとした。

そのとき、遠くから救急車のサイレンが聞こえてきた。

また自殺だろうか……。

新宿歌舞伎町の雑居ビル屋上でガソリンをかぶり、火をつけた上で投身自殺した男は、中堅芸能プロダクションの副社長だった。CPUゼラのミッチの後を追うように、ミッチの葬儀の日にマネジャーの濱口が部屋で首吊り自殺。歌舞伎町のソーランドではテレビ局のプロデューサーが首を切り自殺。このところ芸能界

関係者の自殺が相次いでいる。

直接芸能界の人間とは言えないが、ゼラのミッチの後追いと見られる若い女性ファンも数人、自殺をしていた。

しかも、それらの自殺は、この新宿を中心に起きていて、偶然にも二件の自殺現場に創司は遭遇している。

客が店に入ってきた。

「えーと、おたくにはフゲン はないですか？」

気弱そうな中年男性が、上目遣いで創司に訊いた。

「あいにくですが、うちでは扱っておりません」

創司は慇懃に答えた。

五〇二号室のドアを開けると、中では鑑識課員が二人、まだ指紋や遺留品の捜査を続けていた。

「郵便受けには二週間前の消印の郵便物が残されています。管理人の話でも、ここ二週間くらいはまったく見かけた記憶がないそうです」

同行した麻布東署の担当刑事が、高砂警視に言った。

「失踪か……」

高砂は部屋の中を見渡しながら、呟くように言った。

「自殺して発見されていないという線もありますね。海へ身を投げたとか、樹海へ入って行ったとか……」

所轄署の刑事の言葉を遮って、高砂はすぐに打ち消した。

「ここにキャスターの跡があるじゃないか。遺体を誰かが運び出したのかもしれない。だとすれば、プロの仕事だな……それも超一級のプロの」

そこまで喋って、高砂は急に顔を曇らせた。

「何かお心当たりでも？」

刑事の問いかけに、高砂は答えなかった。

リーゼンシー新宿のロビーは数階上まで吹き抜けになっている。ロビーは二階にあり、三、四階は飲食店街。客室は七階以上の階にある。

貴島組の迎えの者に先導され、嵯峨野と創司は、人が行き来するロビーを抜けてエレベーターホールに向かっていた。

作務衣さむえを着ている嵯峨野は、こういう場所では人目を引く。組の男は周囲の視線から嵯峨野を隠すようにぴったりと寄り添って歩いた。

そのとき、エレベーターホールから、紺色のスーツを着た若い女がこちらに歩いてきた。

女は何か慌てている様子で、落ち着きなく周囲に視線を配っている。

創司はすぐに彼女の異常に気づいた。

まだあどけなさの残る顔は青ざめ、身体からは、乱れた邪気が発散していた。恐らく、嵯峨野もそれに気づいているだろう。

創司はその後ろ姿をさりげなく目で追いかけたが、女はホールに出ると、すぐに外へ出ていった。

エレベーターで三十三階まで登り、通路のいちばん奥の一室に案内された。

スイートルームの奥の部屋に、初老の男と、昼間店に来た長身の痩せた男が待っていた。

「わざわざご足労願いまして恐縮です、総代。……いや、今は普通に『先生』とでもお呼びしましょう」

初老の男がソファから立ち上がって嵯峨野を出迎えたので、そ

ばにいた背の高い男も慌てて立ち上がった。

「元気そうだな、進吉」

「おかげさまで、こうして生きながらえてますよ」

日焼けした顔には、深い皺が何本か刻まれている。白目がやや濁っていて、あまり健康そうには見えなかったが、目の光には底知れぬ暗さが宿り、堅気でないことはすぐに分かる。

貴島は嵯峨野をソファに案内しながら、創司のほうに目を向けた。

「こちらは？」

「弟子の守安だ」

「驚きましたね。総代……いや、先生はもう、生涯弟子はとらないと思っていましたか」

「そのつもりだったが、この歳になって、気が変わった」

「そうですか。……まあ、先生が信頼されているお弟子さんならいいでしょう。」

これは私の秘書で酒見といいます。腕は立つんですが、ときどき余計なことをするのが欠点でしてね。何か先生に失礼を働いたりしていないといいのですが」

貴島は痩せた長身の男を指さして言った。

「いや」

嵯峨野はぶつきらぼうにそう答えると、ソファに腰を下ろした。酒見という長身の男は、店に来たときは一言も喋らず、金バツジの男の後ろに立っていただけだったが、組の中でのポジションはかなり上のほうにあるのだろうか。

貴島は部屋の中に酒見だけを残すと、あとの男たちは全員部屋の外に出してドアを閉めた。

「三十年ぶりくらいになるんだろうが、三十年分の挨拶をしていたら夜が明ける。話というのは何だ」

嵯峨野がそう切り出すと、貴島は安楽椅子に座り直した。

改めて嵯峨野を正面から見据え、かすれてはいるが、明瞭な発声で話し始めた。

「いきなりですが、先生はフゲン というものをご存じですか？」  
「名前だけはな。それがおまえさんの商売と関係あるのかね？」

「ええ。ただ、どう関係しているのか、先生にお話しするつもりはありません。今さら先生を裏の世界に引き込むつもりはありません。どうか、訊いたことにだけお答えいただけませんか？」

嵯峨野は、今度は返事をしなかった。

控えていた酒見が動こうとしたのを、貴島は目で制し、かまわず続けた。

「フゲン の実物を見たことはありませんか？」

「ない」

「これなんです」

そう言うと、貴島は懐から薬包紙に包まれたものを取り出し、テーブルの上に広げた。

中から、黄土色の薬が現れた。かなり大きく、錠剤と言うよりは丸薬と呼んだほうがいい。完全な球形ではなく、いびつな楕円形だ。

「ずいぶんでかいんだな」

嵯峨野は少し身を乗り出して、薬包紙ごとその丸薬を目の前に持ち上げた。

軽くおいを嗅いでみる。

「先生くらいになると、においだけで成分が分かるんですか？」

貴島が興味深そうに訊いた。

「……まあ、ニンニク抹とケイヒくらいは分かるがな。フゲンはデマだと聞いている。これが本物だという証拠は？ 試してみたのか？」



「いいえ。今では私の手元にもそれ一つしか残っていません。フゲン は回収されたんです」

「どういうことだ。回収されたということは、それまではおまえさんたちが闇で流通させていたということか？」

「お答えしかねます。先ほども申しましたように、こちらの質問にだけ答えてください。先生は本当にこれを見るのは初めてなんですね？」

「ああ」

「そちらの兄さんは？」

貴島は創司のほうを見た。

「私も、単なる噂だと思っていました。もともと、噂にのせて、得体の知れないインチキ薬を高く売りつける商売があったかどうかまでは分かりませんが」

創司の挑戦的な言葉を無視して、貴島は嵯峨野のほうに向き直った。

「先生もお弟子さんも、フゲン などご存じないとおっしゃる。では、質問を変えましょう。頼田よりたという男をご存じですか？ 先生の店をよく利用していたらしいんですが」

「名前を言われても分からんな。患者以外は名前など訊かんしな」  
「角刈りの、まだ二十代の男です」

「分からん。それがどうしたんだ？」

「頼田はうちの若い者もんです。先日、死にました」  
貴島は淡々と告げた。

「てめえの脳天にチャカあてて、ぶっ放したんです。そのとき、隣の部屋には組員がいましたし、自殺に間違いはありません。チャカの出所を調べられると面倒なんで、死体は裏で始末しました」  
が

部屋の中に、数秒の沈黙が流れた。

嵯峨野が何も言わないので、貴島はさらに話を続けた。

「このフゲン は、そいつが持っていたものです。しかし、やつのような三下さんしたに、この薬は指一本触れさせてません。まして、やつにはこれを買う金もありません。フゲン の闇価格をご存じですか？ 一錠三百万円です」

「三百万？」

さすがに嵯峨野も驚いて訊き返した。

「ええ。それでも売れたんですよ。信じられないかもしれませんが、買うやつがいるんです。回春効果だけでそれほどの金額を払うとは思えませんから、よほどいいんでしょうね。二度、三度と買うんです。三回買えば九百万ですよ。薬三錠が最高級のベンツと同じ値段つてわけです。世の中不況だのなんだの言ってますが、あるところにはあるんですよ。」

それに、年寄りには金の価値観が違うんですね。あと何年生きるのか分からないですから。三百万で狂おしいほどの快感を得られるなら、高くはないでしょう。」

そのフゲン を、なぜ頼田のような若造が持っていたのか……それが分からないんですよ。当の本人が自殺した以上、どこから手に入れたのか、聞き出すわけにもいきませんしね。」

いろいろ調べましたよ。この世界では信用がすべてですから。そして浮かんできたのが、どうやらフゲン をべらぼうに安い値段で流しているグループがいるらしいということです。頼田もそこから手に入れたらしいんですよ。」

で、そのグループのことを調べていくうちに、先生の店が浮かび上がってきたってわけですよ。」

「見当外れだな。言ったように、わしはフゲン はおろか、フゲン という薬のことともよく知らん」

「先生がご存じなくとも、宇川……おたくの番頭さんは知ってい

たんじやないですか？」

貴島が、左の頬を指でさすりながら言った。大きな傷跡が残っている。その古傷を確かめるように、二度三度とさする。

「宇川はクビにした」

「そうらしいですね。なぜです？」

「やつがフゲン という薬をわしに隠れて仕入れ、客に定価以上で売りさばいていたことが分かったからだ」

「フゲン だけでなく、ハルシオンやリタリン、クロロホルムまで売ってましたよ。インターネットを使ってね。そのへんまでは、私も、もう突き止めています。その中にフゲン はなかったのか？ それを知りたいんです」

「分らん」

「本当ですか？」

貴島は念を押すように、少し身を乗り出しながら言った。

「何度も言わせるな。わしは宇川が裏で何をしていたか知らん」

「宇川つてのは、ムジナさんの息子ですよね？」

「…… そうだ。あいつとの縁で、わしが預かっていた。だが、何を教えても、ものにならんものはならん。性根が腐りきっている。ずっと我慢してきたが、見切りをつけた。」

ただ、これはわしの勘だがな、宇川は大したタマじやない。品薄の市販薬や、医者の方がないと買えない薬を高値で横流しする程度が精一杯だろう。そもそも、そのフゲン という薬は、どこから仕入れるんだ？」

「そちらからの質問にはお答えできません。これは先生の身を案じてのことです」

貴島はそれまでよりきつい口調で言った。

「よかろう。だが、わしらにはこれ以上のことはまったく分からん」

「では、宇川に直接訊いてみるしかありませんね。やつはどこにいますか？」

「家におらんのか？」

「ええ。ずっと帰ってませんね。インターネットの裏サイトにも、このところ出没した気配がありません」

「それではわしにも分からん。あいつが店の客に怪しげなものを斡旋していたなら、わしもその背景をきちんと知っておきたい。分かったら教えてもらえんかね。だが、父親には関わるな。やつは癌でな。もう長くはない。息子のことも、わしに託してからは完全に縁を切っている」

貴島はそれには答えず、黙って嵯峨野を見つめ返した。

数秒の沈黙の後、貴島は立ち上がった。

「ご足労おかけしましたね。では、宇川に関しては私らにお任せいただけるということでは」

貴島が立ち上がったのを合図に、酒見が近づいてきて、ドアのほうへと促した。

貴島は奥の部屋からは出ようとしなかった。

嵯峨野と創司は、無言のままホテルの廊下へと出た。

酒見は最後まで一言も喋らず、そのまま部屋に残った。ここでは貴島のボディガード役なのだろう。

来たときと同じように、若い組員が付き添った。

エレベーターホールまで来たとき、嵯峨野は若い男に告げた。

「ここで結構。わしらは勝手に帰る」

エレベーターのドアが開いた。

中に入る二人を見届けると、男は軽く頷きながら、そのまま見送った。

ドアが閉まり、階下へと箱が降下し始めるなり、嵯峨野は独り言のように呟いた。

「血のにおいがする」

創司は黙っていた。

今の師匠と貴島の会話の中で、宇川の父親を二人が知っている様子だったのが気になった。宇川の親のことなど、今まで考えたこともなかった。

「師匠。宇川さんの父親って……」

「血のにおいがする」

嵯峨野は創司の問いを遮るように、同じ言葉を繰り返した。

拒絶の響きを含んでいたので、創司はそれ以上は訊けなかった。

血のにおい…… 比喩だと思っていた師匠のその言葉が、現実の「におい」のことだと知ったのは、翌日になってからだった。

翌日、昼のニュースで、リーゼンシー新宿の一室から変死体が発見されたことが報じられた。

バスルームで、初老の男が全裸のまま、血塗れで死んでいた。バスタブに湯を張り、左手首、右の首筋を出刃包丁で切っていた。警察は、自殺、他殺両方の面から調査を進めているという。

現場になった部屋は、創司が嵯峨野に付き添って貴島組の組長を訪れたのと同じ階にあった。死亡推定時刻も、ちょうど組長と話をしていた時間に近い。

エレベーターに乗った直後、嵯峨野が「血のにおいがする」と言ったのは、まさにこのことだったのだ。

創司は嵯峨野に確かめた。

「ほう。わしの鼻も、まだまだ捨てたもんじゃないな」

嵯峨野はとりたてて驚くでもなく、そう答えただけだった。

「この前、私がベルベットで出くわしたのと同じです。男が全裸

のまま頸動脈を切つて自殺。おかしいですよ。何かが狂ってる。なぜ、わざわざそんなみつともない格好で自殺するんです？ ところどころ、ほとんど毎日のように誰かが自殺しているんですよ」「そうだな」

嵯峨野は相変わらず平然としていた。

「狂っていると言えば、今の世の中全体が狂っている。生きていたくないというやつが増えても、それほどおかしくないだろう」「でも……」

納得できないが、創司には、どう言葉を続けていいのか分からなかった。

普段、創司は嵯峨野に口答えすることはない。絶対服従ということではないが、師匠の言葉にはいつも重みがあり、咀嚼するだけで精一杯だった。

嵯峨野の世捨て人のような生き方に対しても、共感こそすれ、反発を感じることはなかった。しかし、今日は無性にぶつかっていききたい衝動に駆られる。

師匠の言動に、いつもとは違う、自然体ではない、演技した二ヒリズムのにおいを感じた。

そのとき、腰の携帯電話が振動して着信を知らせた。

「はい」

出ると、相手は一瞬間を置いてから告げた。

先日、フゲンのことでお電話した者です。申し訳ありません。例のお約束、キャンセルとさせていただきます

あの女だ。頭の中を、様々な記憶と想像が駆けめぐった。

「なぜ？」

すみません。失礼します

一方的にそう告げると、相手は電話を切った。

勘づかれたのだろうか。

考えが整理できないうちに、入り口のほうで人影が動いた。

見ると、一目で客ではないと分かる中年男性の二人組が店に入  
って来るところだった。

男のうちの一人は、商品棚には目もくれず、まっすぐに創司の  
前に歩み寄ってきた。

「どういう偶然ですかね。またお会いするとは」

男は新宿東署の刑事だった。

先日、ソープラントで客がナイフで自分の頸動脈を切って自殺  
した事件のとき、事情聴取をした担当者だった。

「偶然ですよ」

創司は落ち着いた口調でそう答えた。

「客ではなさそうだな」

隣にいた嵯峨野が、創司にとも、刑事にともとれるような間合  
いで声をかけてきた。

刑事は警察手帳を取り出し、嵯峨野に提示した。

「おたくの店員さんは、先日のソープラント自殺事件で事情聴取  
させていただきましてね。今日はそのこととは別件でやってきた  
んですが、少しお話を伺わせてください」

もう一人の、眼鏡をかけた刑事が、鞆の中から何かを取り出し、  
嵯峨野の前に突き出した。

「この男性をご存じでしょうか？」

キャビネ版くらいの大きさの写真だった。隣にいた創司も、自  
然と覗き込んだ。

写真には、血に汚れた生首のようなものが写っていた。首はつ  
ながっているが、目を開き、薄くなった髪は濡れて額に貼り付い  
ている。

「うちによく来る客の一人だ。名前は確か……」

嵯峨野が冷静な声で答え始めた。

「本多さんです。魚蝶うまひのご主人の」

創司が後を続けた。

魚蝶というのは、創司が毎日のように食事を食べさせてもらっている小料理屋の屋号だ。本多はその主人である。昨日は休業日だったが、一昨日の夜は普段どおり店で働いている姿を見ている。

「殺されたんですか？」

創司が写真を持ってきているほうの刑事に訊いた。

刑事は、嵯峨野から創司のほうに向き直って答えた。

「まだ分からないんですよ。だから調べているわけですが。今朝方、ホテルリージェンシー新宿の部屋で、こういう状態で死んでいるのが発見されました。本多さんがこの店に最後に来たのはいつですか？」

どうやら創司のほうが多く情報を持っているらしいと踏んだのか、二人の刑事は創司を挟むように立ち位置を変えた。

「ここで対応したのは一か月近く前だと思えますが、私は一昨日の夜、魚蝶で会っています」

「呑みに行っただんですか？」

「いえ、そういうわけではなくて……」

創司は、毎晩のように魚蝶で簡単な夕食を食べさせてもらっていることを説明した。

「まかな賄いみたいなものですか。で、一昨日の晩は、特に変わった様子などはなかったですかね？」

「いつもと変わりないように見えましたけど。少なくとも肉体的にはそんなに調子悪くなさそうでしたが……」

心の問題までは分からない……と続けたいところだったがやめた。

主人の身体から漏れ出ている「気」のにおいが妙だったことを



覚えている。しかし、そんなことこそ、この刑事に説明しても分からないだろう。

「奥さんにうかがってもね、自殺する動機なんてまったく考えられないっていうんですよ。昨日は、月に二回の休みの日で、ご主人は午後から、パチンコに行くと言って出たきり戻らなかったそのなんですね。で、遺体は今、司法解剖に回っているんですが、この店でよく薬を買っていたというんで、もしかして、最近、なんか変わった薬とか買っていたかと思ひましてね。睡眠薬とか抗鬱剤とか……」

「うちは薬局といつても漢方専門ですし、出来合いの商品をただ売るのではなくて、調合を主体にしています。特に魚蝶のご主人には、いつも専門の調合をしていましたし、ご主人が市販薬の類をうちから買っていていかれることは、まず、なかったですよ」

「どんな調合ですか？ 我々素人にも分かるように説明してもらえませんか」

そう訊かれ、創司は困って嵯峨野のほうを見た。

客のプライバシーを軽々しく口にするのを、師匠が快く思うはずはない。

創司の困惑を見て取り、嵯峨野が乾いた声で告げた。

「特に変わった処方はいくらも。立ち仕事なんで、腰や背中に疲労がたまると。簡単に言えば、そうした疲れを抜く処方だ」

刑事たちは、嵯峨野のほうに不審そうな目を向けた。

しばらく間を置いてから、眼鏡をかけたほうの刑事が言った。

「このところ、新宿界隈で奇妙な自殺が続いてましてね。どのケースも自殺の原因が分からないんですよ。何か妙な薬でも出回っているんじゃないかという説が出てまして……」

「うちとは関係がない」

嵯峨野がぴしゃりとはねつけた。

「誰も関係があるとは言っていないませんよ。ただ、何かお心当たりがあれば、どんな話でもいいから聴かせてほしいんです。噂話のようなものでもいいんですがね……」

「何もない」

刑事たちはさらにいくつか質問を重ねたが、嵯峨野も創司も何一つ目新しい情報を提供しないので、十分ほどで引き上げていった。

刑事たちの姿が完全に見えなくなってから、創司は嵯峨野に言った。

「やはり、宇川さんを通して、この店はフゲン の流通に間接的にでも関わっていたんでしょか。宇川さんのこと、調べなくてもいいんですか？」

嵯峨野は険しい顔をしたまま、返事をしなかった。

「……わが社としてはまったく寝耳に水のことであり、ただちに法的な対抗手段をとるつもりであります……」

テレビの画面では、白髪の紳士がぼそぼそと聞き取れないような声で反論を試みていた。が、画面はすぐに異様な光景に切り替わった。

薄暗い地下室のような場所に並べられたウミガメの甲羅。隣には動物の角つののようなものも置かれている。

警察はすでに、しゅんりんどう 惹麟堂の工場倉庫にて、ワシントン条約付属書Ⅰで輸入が厳しく禁止されているアオウミガメ、タイマイの甲羅や冷凍肉、クロサイの角などを発見しており、生産現場の模様も公開されました。

惹麟堂のヒット商品『フゲン』にこれら禁輸品から抽出された原料が使われていたかどうかは不明ですが、密輸品を隠し持つ

ていたことで、養麟堂には三か月の業務停止命令が下されました。分類上はただの栄養補助食品でありながら、精力回復効果があると噂されたフゲン の爆発的なブームは、品薄状態から、闇取引までも生み出していました。これで事実上、今後は生産ができないことになります……

アナウンサーが淡々とした口調で原稿を読み上げた。

まだ客の入っていない魚蝶の店内で、創司は店の奥に置かれた小さなテレビの画面を見つめていた。開店時間の五時半にはまだ数分あった。

魚蝶の主人が謎の自殺を遂げてから、店は数日閉店していたが、一週間も経たないうちに女将が一人で店を再開させた。板場では、どこから見つけてきたのか、若い板前が多少ぎこちなく包丁をふるっている。

ニュースは政局の話題に移っている。

ひじきの煮付けと納豆という夕飯を済ませ、創司は開店準備に忙しい女将に改めて声をかけた。

「ご主人があんなことになって、まだ、ショックが残ってらっしゃるでしょうに、図々しくいつものように押しかけてきてすみません」

「嬉しいよ、そのほうが。近所の連中も、なんだか声をひそめて話している感じでさ、創ちゃんみたいに、普通にしてくれるほうが、あたしはほっとするよ」

女将は、今まであまり見せたことのない種類の笑顔を作っとう言った。

創司は、少し迷ったが、訊いてみることにした。

「ご主人、やはり、自殺ということになったんですか？」

「警察はそう言ってるね。自殺か、無理心中のしそこないだって」

「無理心中？」

「あの人が死んでたホテルの部屋ね。女の名前で予約されてたんだってさ。フロント係が、ちゃんとチェックインしたときのことも覚えててね。なんでも三十前後くらいの、背の高い、芸能人みたいな派手な女だったって」

「殺された可能性はないんですか？ 警察はなぜ自殺だと断定したんですか？」

「首に突き立てられた出刃包丁が、うちの人のもんだったってことと、なんでも、刃先の進入角度っていうのかい？ それも、他人が刺したとは思えないんだってさ。出刃はうちの人か逆手で固く握りしめていたっていうしね。」

警察はね、ただのホテル嬢を買ったたら、店から出刃包丁を持って行くわけがないって言うんだよ。多分、前からつきあっていた女と、最近、関係がこじれてきて、清算しようとしたんだろうって。無理心中をしようとしたのが、女のほうには逃げられて、自分だけ死んだんじゃないかって。

そんなところだよ、きっと。女癖は悪かったからね。私とは三度目の結婚だったけど、その後も、その前も、いろいろあったんだ。子供産ませた女もいたし……」

「フロントが目撃した三十前後で背の高い派手な女性というのに、奥さんは心当たりはないんですか？」

「あの人の女は何人か知っているけれど、三十くらいで背が高いというのはいないね。私が知ってるのは、みんな四十とか五十過ぎだし、私より背が高い女も一人もいなかったね。あの人、小柄で華奢なタイプが好みなんだよ。フロントが見たっていうのは、何かの間違いじゃないかね」

創司はふと、あのととき、エレベーターホールですれ違った若い女のことを思い出した。黒い髪を背中の中程まで伸ばした、まだ高校生くらいにしか見えない少女。だが、彼女は背は特に高くは

なかった。真つ青な顔をしていたので印象に残っているのだが、何か関係があったのだろうか。

「女に殺されたっていうなら、まだ諦めもつくよ。身から出た錆だからね。でも、そうじゃないんだ。自分で首を刺したんだからね。やりきれないね。残されたあたしは馬鹿みたいじゃないか。……まあ、あんたにこんなこと話しても、みつともないだけだ……」

そう言って、女将はむき出しの太い腕を、自慢のぬかみそ樽に突っ込み、自家製の沢庵を一本引き抜いた。

「とにかく、あとは警察に任せておけばいいですよ」

女将には、そう言うのが精一杯だった。

ちようどタイミングよく、最初の客が入ってきたので、創司は入れ替わりに店を出た。

何かが起きている。

そして、自分はもはやその「何か」と関係してしまっている。

逃げられないのなら、立ち向かうしかないのだろうか。しかし、立ち向かうべきその「何か」が見えない。

創司は重苦しいものを感じながら、店に戻っていった。

## （第一章 終わり）

続きは河出書房新社刊『黒い林檎』でお楽しみください。

二〇〇一年十月発売 一四〇〇円

ISBN 4・309・01421・6